

---

# **イナズマイレブン～未来からの逆襲・愛は世界を救う～**

檜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イナズマイレブン～未来からの逆襲・愛は世界を救う～

### 【Zコード】

Z7928Y

### 【作者名】

檜

### 【あらすじ】

雷門中学卒業式から一年後。

平和な生活を過ごしていた円堂達に未来からの刺客が襲いかかる。

王牙学園、第一の勢力を名乗るザ・バベル。

サッカーをこの世から消し去る為、再び未来からやってきた。

そんな中、夏未が攫われてしまった。

落胆する円堂。

そんな円堂の下に、かつての戦友達が集結する。

円堂達は高校生の設定です。

円堂と夏末は恋人同士です。

そのところも本編と並行して書けたらなと思っています。

雷門中学、涙の卒業式から一年後…。

FFIを制したイナズマジャパンや他の者は各中学を卒業後、それぞれの進む道へと歩き出していた。

そのイナズマジャパンでキャプテンを務め、今や日本で…いや世界では知らない者はいないと言つても過言ではない程の人物になつた円堂 守は、中学卒業後はそのままエスカレーター式の雷門高校に入学した。

この雷門高校は、中学と同じく雷門 総一郎が理事長を務めている。ただ、やはり多忙な毎日を過ごしているため学校にいることは滅多に無く、自動的にその権限は娘の雷門 夏末に引き継がれていた。これも中学の時と変わっていない。

そんな雷門高校のいつもと変わらぬ一日。時間はちょうど四時限目が行われている頃。

校舎の三階、その一番端の教室で夏末は、ウエーブがかかった赤茶色のロングヘアを靡かせ、グラウンドが見える窓際の席に座つて、ぼーっと外を眺めていた。

一年、いや中学の頃から成績優秀な夏末は授業を聞かずともテストでは学年トップクラスに入っていた。

だが、いつもこいつやって外を眺めている訳ではない。基本的ち真面目な彼女は、例えどんなに簡単な授業でも急げることなく、いつも真剣に取り組んでいる。

ただ時々、気まぐれに外を眺めていることがある。

その時は決まって、ある一点を見つめている。

グラウンドに設置された、サッカー「ゴール」。

何の変哲もない、何処にでもあるサッカー「ゴール」だが、それをジッと見ていると自然にある人物が浮かび上がる。

サッカーの為に生まれ、サッカーの為に生きているサッカーの申し子。

円堂 守、その人だ。

ゴールポストの前に立ち、迫り来るボールを身体を張つて止める姿が瞼の裏に浮かぶ。

ボールを止めた後は、そのシュー一ト一球一球に感想を述べ、仲間を激昂し、爽やかな笑いを顔一面に見せる。

その笑顔を思い出す度に、自然と頬が緩む。

そんな人物にハツと気づき、頭を左右に振つて雑念を払う。時々見せる、彼女の不思議な行動に教壇に立つ教師とクラスメートはいつも首を傾げていた。

教室に授業の終わりを知らせるベルがスピーカーから鳴り響く。ここで夏末は、自分がこのクラスの学級委員だつたことを思い出し、慌てて号令をかける。

その号令と共にクラスメートは、ガタガタと音を出しながら席を立ち、友達の下へ行つたり、購買へ昼食を買いにいったりと様々だ。

机の上に広がつた教材などをしまつた夏末は、代わりに鞄から弁当箱を一つ出す。

一つは小さくて女の子らしいもの。

もう一つは女の子が食べるには大きすぎるもの。

その一つを持ち、席を立つた。

廊下側の窓を、黒い人影が横切る。

次の瞬間、後ろの引き戸が勢いよく開かれ、大きな声が教室内に響いた。

円「夏末！  
弁当！」

そう叫んだ男は、肩で息をしている。

夏「そんなに大きな声出さなくても、聞こえるわよ」

溜息をついて、呆れた様子の夏末。  
クラス中の視線が集まる中、そんなものは気にもかけずスタッタと  
男の下へ歩いていく。

夏「行きましょう、巴堂くん」

巴堂と呼ばれた男は、おうーと嬉しそうに額を、そのままズンズンと、歩いて行つた。

チラッと教室内を一瞥した夏未は、ピシャリと扉を閉めてその後を追つた。

円「あー！腹減ったー！」

場所は代わり、屋上。

午前の授業で全精力を使い果たした円堂は、その疲れを吹き飛ばすかのよ「うにゴロ」と寝転がる。

見上げると、そこには雲一つない澄み切った青空。

外は少し肌寒いが、真南に昇る太陽の光がそれを中和してくれる。ん一つ、と伸びをしている円堂のそばにゅうくつと夏末は腰を降ろした。

持っていた弁当のうち、大きいほうを円堂に差しだす。

夏「はい」

その包みを見た円堂は「待つてました！」と言ひて、嬉しそうに夏未から受け取つた。

さつそく包みを解き、箱の蓋をパカッと開く。

円「おおーー！」

その中身を見た円堂は、目をキラキラと輝かせて感激の声を上げた。唐揚げ、卵焼き、ミートボールと豊富なおかずが弁当のはにキレイに並べられている。

残りの半分には、三角形に握られたオニギリが所狭しと並んでいた。

円「いただきまーす！」

夏「召し上がりれ」

いつも礼儀正しい円堂に夏未は微笑みながら答える。

その返事を聞くと、円堂は弁当をガツガツと食べ始めた。余程、腹が減っていたのだろう。片手に箸を持つてオカズを取り、もう一方の手にはオニギリが握られている。

それを交互に食べ、口いっぱいに頬ばつた。

「そんなに慌てて食べたら、また…」

「ふつ！？ 「ゴホッ」「ゴホッ…！」

「ほり、言わんこっちゃない」

詰め込みすぎた為、喉にオカズを詰まらせた円堂がむせる。その様子を呆れ顔で夏未は見た。

「そんなに急がなくともお勉強はにげないって、いつも言つてるでしょ」

やれやれ、と思いながら夏未は持つてきていた水筒を円堂に渡す。ドンドンと胸を叩いていた円堂は、それを受け取りフタを開け、一気に喉に流し込んだ。

「んぐつ…んぐつ…ふはー！あー死ぬかと思った！」

麦茶で全て流し込み、大きく息をつく。後少しで窒息したかもしれない。

「まつたく…いつも急ぎすぎなのよ、円堂くんは」

自分の弁当箱から卵焼きを一つ摘み、口に運びながら囁く夏末。

「へへっ… 夏末の弁当上手いから、ついがつこちまうんだよなー」

鼻の頭を人差し指でかきながら、明るく笑う円堂。

その言葉を聞いて思わず頬が緩みそうになるが、夏末は素直に喜びを表現できない。

「あ、当たり前でしょ。私が作ったんだから」

トイとそっぽを向いて、すぐに可愛くないことを囁いてしまう。その度にいつも思う。

なんで自分はこんなに可愛くないんだろう。  
なんでもっと素直になれないんだろう。

昔から人一倍プライドが高かった。

雷門財閥の党首、雷門 総一郎の一人娘として幼いころから受けた英才教育。

お嬢様として育ってきたその性格は、そう簡単に直るものではなかった。

と言つても、円堂達に出会つたことで少しさは丸くなつたようだが。

「ははー…そりだつたな！」

そんな夏末の態度にも円堂は文句一つ言ひもなく、むしろ、それでこそ夏末だと思っている。

再び弁当に箸をつけ、さつきよつは遅めに食べて、料理一つ一つに

「上手い！上手い！」と感想を述べていた。

そんな円堂をチラッと横目で見て、夏末は優しい笑みを浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7928y/>

イナズマイレブン～未来からの逆襲・愛は世界を救う～

2011年11月23日17時50分発行